

論トユダヤ人とギリシヤびとを勸むり五シラスとテモテマケドニヤ  
よりくるるときパウロユダヤびとよりむりて耶穌のキリスト  
なることをおくりて道をいつてあるまじくよあるをあら  
しめしむるにユダヤ人もあはれよそのらひくら誦トよ  
よりパウロ衣をあらむていつれよといひたるハあんぢらの血  
をなんぢらの首に歸せしめられハ答なりのみより異邦人  
トゆいんせつひさあるをさりてユストといくる人のいつま  
いるハ神をうやまふものうてその家ハくらといたる  
かきつれハくらいなるの宰クリスポおひびその家族みる主  
はあんぢらにコリントびとよりて道をきき信トバプテスマ

うけしものもおほりき九主ある夜まほありハパウロコ  
うてきたまひたるハおほりなるれ黙せしめしつてくる登  
トそハわれなんぢとともハあはれはんぢは害せんとして  
せむるものなり。くらあの邑よりわがおほりの民ありト  
よおひくパウロ一年と六ヶ月のあひごりたるのなりよと  
て神の道はをくたりトカリヨアカヤの代官よりと  
ユダヤ人もあらはあをせしめてパウロをせめりれを裁判所  
ひきさくす。といひたるハあはの徒ハあきてよをむきて神は  
とがむらと人よとむるものなり。トパウロはひらら  
んとせしむるガリヨユダヤびとよりいひくるハユダヤ人は



一不義奸惡のこゝなるババツなんぢらより聽きいあはれ  
 あり十五 ありれども一言語あまひハ名字あならびあんぢ  
 らのおきての論ろんなるババツなんぢらもぐりあはれは理ことづい  
 れのころあとの審士さんしたちとあのみんまのころあはれはさ  
 いもん志しよりあひのぞせりまことよおひてまはるの  
 キリシヤびと會堂かいどうのつとあるソステネとてく裁判さいばん所しよのま  
 へあてむちうてあ。ガリヨかりよいさうよこのあはれは意いとせざりき  
 六 バウロパウロこのころあはれはひささくともまき後のちきやうどい  
 こいとあをつげてプリスキラあはびアクラととも舟ふねよ  
 スリヤすりやよわする。うれケシクレアケシクレアよあはれとてま誓願ちかまよよとて

髪かみをそれる九 うれエペソエペソよつりて二人ふたりをそれよとてめあ  
 きみづうう會堂かいどうよつりてユダヤびとあ論ろんせり下衆げしゆうれがひ  
 さくともよらんあはれは請まがたねぞうけがらばして三  
 ころあはれがひのひたるとわれこのきさらんといはる節ふしを必かならず  
 エルサレムエルサレムよあつて守まもらざるをえだ。うれども一神かみある一たは  
 ちあはれびあんぢらよ返かへる一とつひよ舟出ふねだしてエペソ  
 せさるカイサリヤカイサリヤよつきあつてエルサレムエルサレムよのあはれを教會かきの  
 安否やすやすをあはひてのちアンテラケアンテラケよとぞり三 志しばくくこのころ  
 ろよ住すまてまことでたちガラテヤあはびフルギヤフルギヤの地ちをつぎく  
 一經きんてまはての門徒かどらとてさうせり言ことにアレキサンテリア



ようかれーユダヤびとよて辨才あるものなり 聖書は達したる  
アポロとカウラなる人エペソよきうれを 五 人の人をもくよ  
主の道のせうへばうけ出らるを熱して耶穌のあはれ  
つまびくのよとふされたるヨハネのバプテスマをいれる  
のよめられしめてこの會堂におりてをいふはかた  
たりバプリスキラとアクラあれをきうてうれをおのが家よ  
まねき神のみらをとほもほまびくよよとまあうせりモ  
アポロ アカイアよゆんとせうバ兄弟ども書をおくまを  
でしちちよかれをうけつれんことを勧ぐれつてまを  
恩よよと信せしものとおわいよたはけたり 六 こそうれ

聖書はひきて耶穌のキリストなることをあかししひらぐの  
まくよでユダヤびとと甚つひあせたれをあり

第十九章

アポロのコリントよを起るときパウロ東のこの地  
を去てエペソよきうれある門徒どもあひてニ  
ひらるはるんちう信者とありしとき聖靈をうけやあこ  
つくるをわきうを聖靈のあるあこつてよきうれきパウロ  
のひけるはさうバなんちうバプテスマをうけて何よのき  
れーやあこつてけるをヨハネのバプテスマよのきうれつて  
パウロのひけるをヨハネをまことよ悔改のバプテスマをみ  
民よあこつてわれのあこつて來者どもあこつて耶穌キリストを



まんせよといひぬり五つねをたれとまきバプテスマをうけ  
まいよほの名よのれをまきり六パウロ手とそのうくよあき  
多れを聖靈うねり臨みあまなるらあぐの方言うそ  
たそら預言せり七その入あふそ十二人なりきハパウロ  
會堂ヨのそをうらばし神の國のこをらんトつらき  
すめり三ヶ月を過り九あつるよかこふよしあれを  
信ぜざるひらぐありおほくの人のまきよその道をそま  
くれをパウロうねりをなれ門徒うらもそつれさせ  
日々テラノスといひける人の講堂よあひく論せり十二年の  
ひさのくあましつをユダヤびともギリシヤ人もまきてアジア

よまらるものあらぐくまのあまをばきぬ士神をパウロの  
手よりたぶなうぬあまきのわざを行たぬり士ま  
をちパウロのかうだよあれする汗巾あるひハ襜衣とそま  
やりるものよつけられバ病ハさそ悪鬼をのせり十三  
よ諸所をりまきてまじなひをなせるユダヤびとあり悪鬼  
よつれするものよむらひ試しまいよほの名をよびてい  
ひけるをわれらパウロガのふるそあらの耶穌よりてな  
んぢよいせんころとちのそむ言このくなせるものもユダヤ  
人あるスケワといひける祭司のそこの七人の子なり士悪鬼  
くくといひたるをわれら耶穌とあままきパウロにれをさ



れどなんぢらハ誰ぞや其惡鬼よつられたる人らなるのう  
つよとよりあがりたれようちやあせりたれバつれり傷  
つけられはるるその家とよげされまじのあやエペソ  
よきあるまじくそのユダヤびとギリシヤ人よきいそ一づの  
れらみるもそれとひまぬまじ主いひその名あがめられ  
たを其まじ信ぜしものれうちおほくまじりて自らいひ  
あうをその行あそとうつてくまじり其まじりて魔術を  
おこるるおほくのものともその書籍をあつらひらぐ  
のまじりてやけまじの價をかたくて銀五万やうることを志  
れし主の道ひらまりて勝とくることこのまじりて

のあやのまじりてのちパウロをマケドニヤおよびアカヤとま  
ぎエルサルムとゆいんとあうろとさざめいひらるる我か  
あよゆきそのちのちろマテも見るまじりてまじりてあ  
れははうあるものうちテモテとエラストの二人をマケドニヤ  
よつてまじりておのれを志ばらるるアジヤよまじりぬこの  
とまじりてその道よつらてひとこのあうぬさわぎあられを  
いひらるる銀工あり名テメテリヲとりふられアルテミス  
の銀龕とつくりさるるらんらよ利をえせまじりてあやまじ  
たつてまじりてその工人あやびおのつたまじりての業のもの  
をあらせりひらるるまじりてよわれらの富をまのなり



をひよもつるあとなんぢくの知とあるなり 六 出のパウロ  
手よそつられるものい神とありびやひておぼくの人と  
まゝゆまどをーたゞはエペソにみならずほほとんとアジア  
中よあよぼせを。あれまゝかんとぢくに見とる聞とるな  
まモあそたぢうれくの業のからしめらるゝあやふみある  
のみならずアジアおよび天下あぢきてあつちるところの  
おろいある女神アルテミスの宮をなみせられその威光もま  
ごほろふぢー元 一うれあれあまはあぢく怒さけ  
びりひたるを大なるうなエペソびとのアルテミスよ元 二  
よおりて舉邑おほのよみぢれパウロの同行なるマケドニヤ人

のカイラスとアリストタルコをさらくうれくあゝるあをせて  
園よおーいれを 三パウロそは人々はなるよいらんとせー<sup>戲</sup>  
よ門徒たちあれとゆるるまゝまゝ 三まゝアジアの祭とつ  
さるものうらようれとあゝるまゝのものありて人  
のあつてのそーそのみづうう園よらさらんあつてま  
とめたま 三その時あるひとん彼ことといひあるひとま此  
ことぢりひさけらる。そを會衆みぢれて大半のやまのうあ  
よあつまれることあぢぢれなり 三あゝにかりてユダヤ  
人アレキサンデルよいでんあつてはひくめくれをあるひと 群集  
のうらよりあれとおーぢーぬ。アレキサンデル手とらうごの



民よむらひて事實をつぐんとせしむ言つれは其のユダヤ  
人たるを考ふるがゆゑにのみあかしく聲をあげて大なる  
なエペンびとのアルテミスより一時のあひださげびあ  
つて書記官ひとごとを考づめてりひくるをエペンの人々よ  
みのエペン天よりおちりおほいあるアルテミスのみやよつ  
うの邑なるを考ふるものあらんや此の事をひひけ  
きこてあかざるをなんぢらあぢやかよしてみざるは事  
をなげしうづるをこのひとごとをみやの盜賊ともあは  
れなんぢらの女神を考づるものよもあはれ考ふるになん  
ぢらこれをひきてたまり 三 テメテリヲあひびともたにあると

ころのさいくみんし人ぢらたかあるあやあはれをさすま  
の目ありこの代官あればたごひよあれよらたかある 三九  
し他のあはれづらよつらるもとむるあやあはれを律法よか  
たふあつたまよおらてささむぢら 四 わねら今日のさわざ  
よつらてハ訴らるんことあはれを。そのこの聚集よつらて  
ひひひくくづきこもなむねバなり 四 如此かてをてあつ  
まりをちりせ

第二十章 騷擾のやみりおちパウロを門徒とちをよびつれを  
つげマケドニヤよゆんとてりてたちぬ 二 其れ地方を經おほ  
くのあはれを考めてひひくくあはれをキリシヤよらるる 三 あ



よ三ヶ月より、まりて後スリヤよりわたりんとせしむるユダヤ  
人の心を害せんといふより、これをマケドニヤ及びギリシヤ  
人とあつらひて定めしむ。この時、アジヤをめぐりて  
―このはプロスの子ベレアのソパテルおよびテサロニケびとの  
アリストタルコとセクンド、デルベのカヨスとテモテマとアジヤ  
テキコとトロピモなり。五、このとき、バビロンを去りて  
トロアスより、我儕とすて、六、たぬりぬ餅のいもひの  
おちちわれり。ピリピより舟出、五、五日め、トロアスより、  
このころ、あひてそのころ、七日とす、まねき。〇、一週、  
このころ、日われり。パンとさくころめ、集り、パウロつきの

日、いそた、ん、お、ひ、う、れ、う、道、と、い、ふ、こ、ろ、  
つ、け、て、夜、半、よ、り、こ、れ、ま、い、う、れ、う、が、あ、ら、ま、れ、る、樓、は、あ、ら、ま、  
の、燈、あ、り、ユ、テ、コ、と、な、ら、う、ひ、の、わ、の、さ、め、の、燈、よ、  
り、坐、し、て、お、ら、う、の、道、と、い、ふ、た、れ、る、お、  
と、ひ、さ、し、う、り、う、れ、を、い、れ、お、ら、う、よ、ら、う、三、階、よ、り、あ、ら、  
れ、を、た、け、お、と、せ、し、ま、ま、を、死、す、パウロ、と、い、う、て、そ、  
う、く、は、伏、せ、れ、を、い、う、ま、て、い、ひ、く、る、ハ、カ、ン、ち、う、う、れ、く、さ、  
ら、な、り、れ、こ、の、人、の、い、の、ち、う、ら、う、あ、ら、ま、い、う、て、パウロ、ま、  
の、餅、を、さ、き、う、て、う、い、久、く、い、う、れ、う、と、い、う、を、夜、あ、け、よ、  
お、よ、び、て、い、そ、た、り、し、ひ、う、く、さ、ら、少、年、と、な、ら、う、そ、の、活



とみてなかりごなごらめま<sup>十五</sup>さそわき<sup>十六</sup>舟<sup>十七</sup>のなごまご  
ちてアソスよやうりそのとらるよてパウロとのせんとせり。そ  
はうれ陸<sup>十八</sup>よりゆうんとみづうらこのくさごめしなり。よこの  
れアソスよおしそまねくよあひくねがうれをのせそニテレネ  
よりうら<sup>十九</sup>かあごより舟出<sup>二十</sup>してつきのひキヨスの對<sup>二十一</sup>より  
そまたつぎの日サモスよつきトログリムよとまう。次日<sup>二十二</sup>ニレトス  
よりうら<sup>二十三</sup>まそそパウロアジアよ時<sup>二十四</sup>をつひやさぶるためよ  
ふねるてエパンをまきんと意<sup>二十五</sup>とさだめしげゆえなり。このくさ  
ごめしは彼<sup>二十六</sup>あるべくはペンテコステの日エルサレムよあるあくと  
えんといそきたるよよるま<sup>二十七</sup>うてうら<sup>二十八</sup>ニレトスよりまエパン

よ使<sup>二十九</sup>をほのちしてくうとわいの長老<sup>三十</sup>がち然<sup>三十一</sup>よなごま<sup>三十二</sup>のれ  
らごきごま<sup>三十三</sup>しときパウロはれよひくるもやがアジアよ來<sup>三十四</sup>  
し初<sup>三十五</sup>日<sup>三十六</sup>よりつねよなんぢらのあつにありて行<sup>三十七</sup>しごま  
なんぢらがあるところあり<sup>三十八</sup>ま<sup>三十九</sup>あち我<sup>四十</sup>をなごのこごまに  
謙遜<sup>四十一</sup>まごなみごごあがしユダヤ人のえをたてよより艱難<sup>四十二</sup>  
よあひてまよつり<sup>四十三</sup>益<sup>四十四</sup>あるあやまのちはらあらなくあ  
れをのべて或<sup>四十五</sup>はひらぐのま<sup>四十六</sup>あるひに家<sup>四十七</sup>々よおひてなん  
ぢらよし<sup>四十八</sup>神<sup>四十九</sup>よむうひてまごあ<sup>五十</sup>たりま<sup>五十一</sup>イエス  
キリストよむうひてを信<sup>五十二</sup>仰<sup>五十三</sup>はなごま<sup>五十四</sup>ユダヤ人<sup>五十五</sup>まごキリシヤ  
びくよあめせり<sup>五十六</sup>今<sup>五十七</sup>をま<sup>五十八</sup>れあ<sup>五十九</sup>せま<sup>六十</sup>りてエルサレムよゆ<sup>六十一</sup>く。



—こゝろ、遇<sup>あ</sup>らうい<sup>ん</sup>と<sup>あ</sup>らうに<sup>三</sup>た<sup>ん</sup>、聖靈<sup>せいりやう</sup>あ<sup>ら</sup>お<sup>と</sup>よ  
ま<sup>れ</sup>よ<sup>あ</sup>め<sup>し</sup>て<sup>り</sup>の<sup>し</sup>縲<sup>う</sup>縛<sup>わ</sup>と<sup>患</sup>難<sup>わ</sup>れ<sup>を</sup>ま<sup>す</sup>て<sup>ま</sup>と<sup>言</sup>志<sup>し</sup>れ  
ば<sup>も</sup>ま<sup>れ</sup>ハ<sup>マ</sup>ガ<sup>や</sup>く<sup>を</sup>ま<sup>す</sup>み<sup>ち</sup>と<sup>主</sup>い<sup>は</sup>ふ<sup>よ</sup>り<sup>う</sup>け<sup>し</sup>職<sup>し</sup>  
な<sup>も</sup>ち<sup>福</sup>音<sup>を</sup>あ<sup>か</sup>し<sup>ま</sup>る<sup>あ</sup>い<sup>を</sup>と<sup>げ</sup>ん<sup>う</sup>め<sup>よ</sup>を<sup>ま</sup>す<sup>が</sup>生<sup>いのち</sup>命<sup>を</sup>  
張<sup>も</sup>ち<sup>ん</sup>ぜ<sup>が</sup>る<sup>な</sup>ま<sup>三</sup>今<sup>い</sup>わ<sup>れ</sup>知<sup>ち</sup>か<sup>ん</sup>ぢ<sup>う</sup>の<sup>う</sup>ち<sup>を</sup>あ<sup>め</sup>  
ぶ<sup>ま</sup>て<sup>神</sup>國<sup>を</sup>つ<sup>く</sup>ま<sup>し</sup>わ<sup>ら</sup>ぶ<sup>面</sup>と<sup>こ</sup>の<sup>お</sup>の<sup>ち</sup>な<sup>ん</sup>ぢ<sup>う</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>て</sup>  
び<sup>み</sup>ま<sup>す</sup>る<sup>ま</sup>—<sup>六</sup>お<sup>の</sup>ゆ<sup>ゑ</sup>よ<sup>わ</sup>れ<sup>今</sup>日<sup>け</sup>か<sup>ん</sup>ぢ<sup>う</sup>よ<sup>證</sup>を<sup>す</sup>す<sup>べ</sup>  
て<sup>の</sup>ひ<sup>と</sup>の<sup>血</sup>よ<sup>あ</sup>い<sup>て</sup>ま<sup>れ</sup>い<sup>は</sup>ま<sup>き</sup>よ<sup>く</sup>し<sup>て</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>ま</sup>  
と<sup>な</sup>り<sup>—</sup><sup>七</sup>ま<sup>れ</sup>神<sup>の</sup>旨<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>す</sup>ま<sup>す</sup>る<sup>か</sup>ら<sup>あ</sup>ら<sup>う</sup>ぐ<sup>な</sup>  
ん<sup>ぢ</sup>う<sup>よ</sup>の<sup>ま</sup>た<sup>れ</sup>ば<sup>あ</sup>り<sup>—</sup><sup>八</sup>ゆ<sup>ゑ</sup>よ<sup>な</sup>ん<sup>ぢ</sup>う<sup>ま</sup>ら<sup>う</sup>慎<sup>ん</sup>  
ん

つ<sup>な</sup>ん<sup>ぢ</sup>う<sup>の</sup>聖<sup>せい</sup>靈<sup>れい</sup>よ<sup>た</sup>て<sup>ら</sup>れ<sup>て</sup>監<sup>かん</sup>督<sup>と</sup>な<sup>れ</sup>る<sup>そ</sup>の<sup>全</sup>群<sup>を</sup>  
つ<sup>く</sup>し<sup>み</sup>主<sup>の</sup>お<sup>の</sup>の<sup>血</sup>を<sup>あ</sup>か<sup>し</sup>ま<sup>す</sup>る<sup>か</sup>ら<sup>あ</sup>ら<sup>う</sup>の<sup>教</sup>會<sup>と</sup>  
や<sup>—</sup>つ<sup>な</sup>ん<sup>ぢ</sup>う<sup>の</sup>ま<sup>は</sup>ら<sup>う</sup>の<sup>お</sup>の<sup>群</sup>と<sup>ま</sup>す<sup>ま</sup>  
る<sup>あ</sup>ら<sup>う</sup>き<sup>狼</sup>な<sup>ん</sup>ぢ<sup>う</sup>の<sup>中</sup>よ<sup>い</sup>らん<sup>ま</sup>ま<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>ま</sup>ら<sup>う</sup>  
な<sup>ん</sup>ぢ<sup>う</sup>の<sup>か</sup>ら<sup>の</sup>よ<sup>り</sup>も<sup>門</sup>徒<sup>たち</sup>と<sup>あ</sup>の<sup>れ</sup>よ<sup>あ</sup>ら<sup>う</sup>ま<sup>ら</sup>う<sup>ま</sup>  
と<sup>ま</sup>す<sup>こ</sup>し<sup>ま</sup>る<sup>言</sup>と<sup>つ</sup>ひ<sup>り</sup>の<sup>お</sup>の<sup>ら</sup>ん<sup>—</sup><sup>三</sup>お<sup>の</sup>故<sup>を</sup>  
よ<sup>な</sup>ん<sup>ぢ</sup>う<sup>の</sup>ま<sup>ら</sup>う<sup>ま</sup>ら<sup>う</sup>せ<sup>よ</sup>。わ<sup>ら</sup>が<sup>三</sup>年<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>ひ<sup>ご</sup>よ<sup>う</sup>も<sup>あ</sup>ら<sup>う</sup>ま<sup>ら</sup>  
え<sup>は</sup>涙<sup>を</sup>あ<sup>か</sup>し<sup>て</sup>お<sup>の</sup>く<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>め</sup>—<sup>四</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>ま</sup>ら<sup>う</sup>ま<sup>ら</sup>  
よ<sup>な</sup>ん<sup>ぢ</sup>う<sup>の</sup>徳<sup>を</sup>た<sup>て</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>ま</sup>ら<sup>う</sup>の<sup>ま</sup>ら<sup>う</sup>ま<sup>ら</sup>う<sup>ま</sup>  
あ<sup>ら</sup>う<sup>ま</sup>ら<sup>う</sup>業<sup>を</sup>な<sup>ん</sup>ぢ<sup>う</sup>よ<sup>あ</sup>ら<sup>う</sup>ま<sup>ら</sup>う<sup>あ</sup>ら<sup>う</sup>神<sup>あ</sup>ら<sup>う</sup>ま<sup>ら</sup>

新約全書 使徒行傳第二十章 自然九至四七節 七十四



その恩惠のあこむよ今それなんぢうをゆゞぬ 三 王を人の  
金銀衣服をもさぶらふし 三 王が手のいそれおよ  
びそれともよあやしの需用よそあつしあそそなん  
ぢうがあふららなり 三 王それなんぢうもかく勤勞てよわ  
きものさたけけうらまい返さぬひたきふる受よりも與  
えついでいなりどのあやをさうらふよ記づきをまぐての  
事よおいてあめせるなを 三 王パウロうくかゝるまで曲跪まぐ  
てのゆのともよいのれを 三 王うれらふあほいよながき  
パウロの頸をいたきをまねく接吻しそのあつてびわが面を  
見ましといひしあつてをようをさうけても憂をなすしうれ後

舟までともあつて

第三章

つとく強てうれらふしうれ舟よを真直よコスよい  
たり次日ロドスよゆきかしまよをパタラよいし 三 王  
よわらふねよ遇まねよのまをりて 三 王プロと望んでそれ  
は左よはぎスリヤよわらふをツロよつけをそむのともろ  
よけあねの積荷はあふさんよひねぶなり 三 王うれらわねく  
門徒たちとさひそこよ七日ともまねをうれく靈よかんと  
てパウロよエルサレムへゆくなりれとつふ 三 王それよをよ七日  
とまごしうれをわねらつてたもて途よつと。のあつてその妻  
撃ともむにわねらとあつてて 三 王 邑外よまをりしうれらわねらと



岸よりひきまぎきていのこ 六 互はわれとつげとほまを  
のちわれは舟よのちわれをその家より連れよせられ  
らッロよりトレマイよまじりまてよ舟路とまじりぬ。ついで兄  
弟たちの安否をいひつれつととも一日とまじり 八 次日  
いでたちてカイザリヤよりつり福音をつふるピリポの家  
よりついでともよこまじり。このピリポハ七人の一人なり 九  
のち預言する四人のむねあり。みま處女なり。十 わきり數  
日ありよこまじり。ときアガボスと名するひとその預言者  
エダヤよりつれつとまじり。つれつとまじり。パウロの帯と  
つれつとまじり。その手足をまじり。つれつとまじり。そのおとこ

エルサレムにあるエダヤ人を其のむねのぬりとをまじり。其邦人  
の手よりつれつとまじりと聖靈のたまをよこまじり。そのおとこ  
つれつとまじり。その地のゆめとともつれつとまじり。エルサレムの  
つれつとまじり。パウロありけるいかなんぢらかなんぢら  
てわがころを推やつれ。主のまじり。その名をよこまじり。よ  
まじり。そのむねはエルサレムは成るもまじり。甘あるととも  
なり。つれつとまじり。めとつれつとまじり。主のむねのまじり  
くなれつとまじり。止まじり。まじり。數日とまじり。つれつとまじり。行装とまじり。  
エルサレムよまじり。カイザリヤのてらちちも數人つれつとまじり。  
そのまじり。ゆめとまじり。つれつとまじり。クジロのナンジといつれ。老門徒のこと



とよやがせんとしてその家よとちかひりぬまわさ  
エルサレムよいたる多岐を兄弟よちよあびてそれをもて  
ふつぎにひパウロそれとてとてヤコブの家よいよに  
長老よちみよあらまうされしパウロの安否よい  
うら神のおのれを用ていさうどんのあつた行たひいこ  
やを一やつがくをて手うれよあれをまき主とあがめうら  
うれよひりをも兄弟よちユダヤびとの信ぜよもれ幾  
萬やをもあつれくもみる律法よ熱心なるものなり三  
んち異邦人のあつよあるユダヤ人よいよるるモーセと  
てしめうら兒子ようらをいをあてちよるれ例よたさか

ふかのりれといつてそのあつてうらうらとまきた  
三三今いうよまきまをあほくのんちのまきと  
きよてあつたあつたうら三三の故よるんちわれうがい  
ふとらあよまきうらうら誓願のもの四人あり言なん  
ぢこの人々とたがさくあれとてまよまきよあつた  
てその費をあがなひうれよよ髪とるるをえせよめよ  
さうを人々ちよつてまきよとあつたみよ虚よてな  
んちの律法はまよりておとなるるうらあつた信ト  
たも異法人よわられくまきよ書とらきおらてかふるた  
ぶひおあつた守るよあよなびた偶像よさげーものと



血とろくびをあらせしものおしむ姦淫をけしむを  
さだめりてパウロを次日のひらぐとたがさんて  
ちねとまめにまじめおとすや且ちうねる各々のしめは供  
物とさしむるまじきものそれ期までよきものおとすの日を  
たさんころと殿よりつぎ七日とほんとほるとき  
アジアよりきたローマユダヤびとパウロのみやよき紙見てを  
あそびの民とさうだす一めかれとさうく示さけびくるを  
イスラエルの人をわねるとたけけよまね人もあまねく教を  
つぐこの民と律法とまの處よさうらふものなり。まじりシヤ  
人をもひきを殿よりまじきものさうとけがーたを元

そをうねるまじきよエソソ人トロピエとつくるものパウロとど  
もに城下よあまねくをてパウロおれとみやよひきおれ  
とおしめるあり三すくにおいて擧邑さあきたち人々かけ  
あつまりてパウロおれと殿よりひきつぎ一くれを  
たがちよその門とちたき三うねるまじきよパウロとあらさ  
んとせしときあまねくエルサレムみだれたりとのうもさ千夫  
のころれ長よまじきえくき三うねたちよ兵卒と百夫の  
うーらとまじきおのれらのもとにませとせられ。うねる  
千夫のうーらと兵卒とみてパウロとさうくをやむ三その  
とき千夫のうーらとちうのうをてパウロとさうく命とて二のく



うまゝあてあられはつなぐせ。そは誰たるまゝ何事とあせし  
とたぐねる言 おほくの衆中あるひとものころをひ  
或もあつらふをいひさげびみだれよりて千夫のうら  
その實情をあることあつたべこのゆゑは命とせうれと陣  
營はひきゆるしめり 三三三 おほくの人のあつたあつて  
うれしうせとよびさげびおしせするよとせし階はあよ  
あつるとき兵卒パウロをあつて 三三 パウロひりて陣營より  
んとせしとせせんはんの長はひひたるをわれをんぢまか  
たをてよきやいあや彼あつてくさるいあんぢギリシヤのこと  
いとあつたや 三 かんぢいさきよ乱とおとし 四 千人の凶徒と

ひきぬて野のいをーエジプト人あつたや 三九 パウロいひたるは  
われはギリシヤのタルソよりまれーエダヤびとよて 四〇 郡邑の  
たみよあつたはあつた民よつたるあつたはわれよゆるせ  
甲 せんまんの長あねをゆるし 四一 くれをパウロまがまのし  
またち民よむらひて和とらごうし 四二 そのおほいよあつた  
るときへブルのあつたをよめて 四三 られよあつた

第七章

事実をなんぢらまけ 四四 うれらそのへブルのあつたをよめて  
語るときいよくあつた 四五 パウロひりたるはわれを  
エダヤ人よてギリシヤのタルソよ 四六 生るのてあつたの邑のがマリエル



の足下よそそぐせられ先祖のおとそそのある律法よよそそ  
どしつられ神よ熱心かろしあしを今日のなんぢらよそそ  
のその如くかりき われさきよは道のひとと男女と  
も志をこころ獄よわし死よりつるまをよそそせめ  
五 まるりち祭司のこころ長老會のひとのわれよついで  
みやあつしとなれつごころ。われうれつたり兄弟たちよお  
ろるふみと受けダマスコよとるものと志はりてエルサレムよ  
ひきたり刑と受けさせんとてついであしむり六さ  
れと我ゆきつてダマスコよちつづけるよ時おほつとひるごら  
たちまち天よりおほいある光あるをわきとめたりてせ

いし され地よたつる。そのときサウロはサウロなるゆゑわれ  
とせむるやとりし聲ときくハ、われあつくるを主よあん  
ぢハ誰ぞやわれよひくるハ、われなんぢらせむるとそ  
ろのナザレの耶穌なり。われとらもよあししもの光とみそ  
おそれらるされど、われよついでしもの聲ときくつごりき  
十 されしひくるを主よされよとかなれまきての主よわれよ  
ひたぬひくるハおきくダマスコよ往きよよさだましし爾が  
なれまきこころを彼處よおしそかんぢまつごべし。その光  
のがぢやきよよらつてわれみるあつとをえんなりとわがされ  
こころにふししものなまよたけられてダマスコよついで



この邑にまゐるまゐるユダヤびとのなるはほまれあ  
るアナニアといふ律法にまことづくす神をうやまひ入<sup>十三</sup>りわが  
もくにきこさうたもろよ立てりひくると兄弟サウロあさ  
たびみるあつとを得よ。それたちよ目をあげてわれを見た  
る<sup>十四</sup>われもろりふわれくの列祖の神はなんぢよ神のむね  
をーらーめらの義者をみさせその口よりいつるまゑとき  
かーめん<sup>十五</sup>うそをさぐめたくもそ<sup>十六</sup>そはなんぢわれが  
よその見聞せーあつとをめぐりての人はむろいあうーび  
とあるをわれをあり<sup>十七</sup>今あんぢいづをたあらふをなん  
ぢたちを主の名をよびバプテスマをうけてその罪滅そくき

さるをーと<sup>十八</sup>われエルサレムようつを聖殿においでのれ  
るときまほろーよて<sup>十九</sup>見けるを主をわれよむろひて急うれ  
らになんぢがわれよついでたる證をうけざるがゆゑよ  
まみやうよエルサレムをうよとひくそ<sup>二十</sup>われひけ  
る<sup>二十一</sup>主よわれよとなんぢ信じるものとくらゐあるひに  
諸會堂より<sup>二十二</sup>これをむちうちーうとをうれふある<sup>二十三</sup>手又あん  
ぢのあうーびとステパンがその血をながさうとまされ傍よ  
たちてそのあつとをよとよーとわれはあつとをの衣  
はまのれを<sup>二十四</sup>主よわれよひくるとゆけられあんぢは遠い  
そつとんよつらひはをー<sup>二十五</sup>うれきいてこの言はう



みる聲を上げていひくるをかゝの<sup>い</sup>きぬのと地よりさ  
れうれをさきよいのちのあふぐきよのあふざりき<sup>三</sup>のれ  
ら喧呼<sup>せん</sup>でそのころもをぬぎ塵埃<sup>ちん</sup>空中<sup>くう</sup>はあげられ<sup>言</sup>千夫<sup>せん</sup>  
れ<sup>一</sup>ら命<sup>いのち</sup>とパウロ<sup>パウロ</sup>はぢんえいよひきりしめ。何故<sup>なに</sup>の  
うかれら<sup>二</sup>パウロ<sup>パウロ</sup>はむのひてさけぶらとあらん<sup>三</sup>たれむ  
ちうちそ<sup>四</sup>のれよとふべ<sup>一</sup>とい海<sup>うみ</sup>の<sup>二</sup>れ<sup>三</sup>革<sup>くわ</sup>鞭<sup>べん</sup>をあてん  
とてパウロ<sup>パウロ</sup>はひきを<sup>四</sup>と<sup>一</sup>き彼<sup>かれ</sup>そのか<sup>二</sup>と<sup>三</sup>らよなたる百<sup>ひゃく</sup>  
夫<sup>おとこ</sup>の<sup>一</sup>か<sup>二</sup>らよ<sup>三</sup>い<sup>四</sup>ひ<sup>五</sup>くるを罪<sup>つみ</sup>とさ<sup>六</sup>ごめ<sup>七</sup>ば<sup>八</sup>と<sup>九</sup>羅馬<sup>ろま</sup>人<sup>にん</sup>たるも  
れとむちうら<sup>一</sup>を律法<sup>りつぽう</sup>よ<sup>二</sup>の<sup>三</sup>た<sup>四</sup>ふ<sup>五</sup>や<sup>六</sup>三<sup>さん</sup>ひ<sup>七</sup>や<sup>八</sup>く<sup>九</sup>に<sup>十</sup>ん<sup>十一</sup>の<sup>十二</sup>長<sup>ちやう</sup>あ<sup>十三</sup>れ<sup>十四</sup>は  
き<sup>十五</sup>ゆ<sup>十六</sup>き<sup>十七</sup>て<sup>十八</sup>千夫<sup>せん</sup>の<sup>十九</sup>ら<sup>二十</sup>よ<sup>二十一</sup>つ<sup>二十二</sup>げ<sup>二十三</sup>て<sup>二十四</sup>い<sup>二十五</sup>ひ<sup>二十六</sup>くる<sup>二十七</sup>は<sup>二十八</sup>なん<sup>二十九</sup>ち<sup>三十</sup>る<sup>三十一</sup>は

あ<sup>一</sup>ら<sup>二</sup>つ<sup>三</sup>り<sup>四</sup>よ<sup>五</sup>こ<sup>六</sup>の<sup>七</sup>ひ<sup>八</sup>と<sup>九</sup>と<sup>十</sup>羅馬<sup>ろま</sup>人<sup>にん</sup>たる<sup>十一</sup>せん<sup>十二</sup>ま<sup>十三</sup>んの<sup>十四</sup>長<sup>ちやう</sup>  
あ<sup>十五</sup>き<sup>十六</sup>て<sup>十七</sup>パウロ<sup>パウロ</sup>よ<sup>十八</sup>い<sup>十九</sup>ひ<sup>二十</sup>くるを<sup>二十一</sup>なん<sup>二十二</sup>ち<sup>二十三</sup>ハ<sup>二十四</sup>ロ<sup>二十五</sup>マ<sup>二十六</sup>び<sup>二十七</sup>と<sup>二十八</sup>あ<sup>二十九</sup>る<sup>三十</sup>や<sup>三十一</sup>ま<sup>三十二</sup>れ  
よ<sup>三十三</sup>つ<sup>三十四</sup>げ<sup>三十五</sup>よ<sup>三十六</sup>パウロ<sup>パウロ</sup>い<sup>三十七</sup>ひ<sup>三十八</sup>くるを<sup>三十九</sup>き<sup>四十</sup>う<sup>四十一</sup>を<sup>四十二</sup>元<sup>げん</sup>千夫<sup>せん</sup>の<sup>四十三</sup>ら<sup>四十四</sup>あ<sup>四十五</sup>ら<sup>四十六</sup>  
ける<sup>四十七</sup>を<sup>四十八</sup>ま<sup>四十九</sup>れ<sup>五十</sup>を<sup>五十一</sup>あ<sup>五十二</sup>ほ<sup>五十三</sup>く<sup>五十四</sup>の<sup>五十五</sup>金<sup>かね</sup>は<sup>五十六</sup>て<sup>五十七</sup>ま<sup>五十八</sup>の<sup>五十九</sup>民<sup>たみ</sup>籍<sup>せき</sup>は<sup>六十</sup>え<sup>六十一</sup>し<sup>六十二</sup>り<sup>六十三</sup>パウロ<sup>パウロ</sup>  
い<sup>六十四</sup>ひ<sup>六十五</sup>ける<sup>六十六</sup>を<sup>六十七</sup>ま<sup>六十八</sup>れ<sup>六十九</sup>を<sup>七十</sup>生<sup>なま</sup>來<sup>きた</sup>たり<sup>元</sup>元<sup>げん</sup>よ<sup>七十一</sup>か<sup>七十二</sup>いて<sup>七十三</sup>パウロ<sup>パウロ</sup>を<sup>七十四</sup>拷<sup>こう</sup>問<sup>もん</sup>  
せん<sup>七十五</sup>と<sup>七十六</sup>せ<sup>七十七</sup>し<sup>七十八</sup>もの<sup>七十九</sup>を<sup>八十</sup>も<sup>八十一</sup>た<sup>八十二</sup>ふ<sup>八十三</sup>ち<sup>八十四</sup>よ<sup>八十五</sup>あ<sup>八十六</sup>り<sup>八十七</sup>ぞ<sup>八十八</sup>ら<sup>八十九</sup>を<sup>九十</sup>元<sup>げん</sup>千夫<sup>せん</sup>の<sup>九十一</sup>ら<sup>九十二</sup>そ  
の<sup>九十三</sup>羅馬<sup>ろま</sup>人<sup>にん</sup>あ<sup>九十四</sup>る<sup>九十五</sup>を<sup>九十六</sup>ま<sup>九十七</sup>を<sup>九十八</sup>こ<sup>九十九</sup>の<sup>百</sup>れ<sup>百一</sup>は<sup>百二</sup>ま<sup>百三</sup>は<sup>百四</sup>ま<sup>百五</sup>し<sup>百六</sup>し<sup>百七</sup>と<sup>百八</sup>か<sup>百九</sup>そ<sup>百十</sup>る<sup>百十一</sup>三<sup>さん</sup>か<sup>百十二</sup>く<sup>百十三</sup>  
て<sup>百十四</sup>あ<sup>百十五</sup>ら<sup>百十六</sup>る<sup>百十七</sup>田<sup>でん</sup>ユ<sup>よ</sup>ダ<sup>だ</sup>ヤ<sup>や</sup>び<sup>び</sup>と<sup>百十八</sup>の<sup>百十九</sup>こ<sup>百二十</sup>の<sup>百二十一</sup>と<sup>百二十二</sup>を<sup>百二十三</sup>訟<sup>そう</sup>た<sup>百二十四</sup>る<sup>百二十五</sup>ゆ<sup>百二十六</sup>を<sup>百二十七</sup>確<sup>かく</sup>よ<sup>百二十八</sup>ま<sup>百二十九</sup>らん  
と<sup>百三十</sup>か<sup>百三十一</sup>い<sup>百三十二</sup>ひ<sup>百三十三</sup>パウロ<sup>パウロ</sup>の<sup>百三十四</sup>あ<sup>百三十五</sup>は<sup>百三十六</sup>め<sup>百三十七</sup>と<sup>百三十八</sup>と<sup>百三十九</sup>き<sup>百四十</sup>祭<sup>さい</sup>司<sup>し</sup>の<sup>百四十一</sup>長<sup>ちやう</sup>た<sup>百四十二</sup>ち<sup>百四十三</sup>あ<sup>百四十四</sup>ら<sup>百四十五</sup>び<sup>百四十六</sup>全<sup>ぜん</sup>議<sup>ぎ</sup>  
會<sup>かい</sup>よ<sup>百四十七</sup>命<sup>いのち</sup>と<sup>百四十八</sup>あ<sup>百四十九</sup>ら<sup>百五十</sup>ま<sup>百五十一</sup>し<sup>百五十二</sup>り<sup>百五十三</sup>め<sup>百五十四</sup>パウロ<sup>パウロ</sup>と<sup>百五十五</sup>た<sup>百五十六</sup>ら<sup>百五十七</sup>さ<sup>百五十八</sup>く<sup>百五十九</sup>ゆ<sup>百六十</sup>きて<sup>百六十一</sup>そ<sup>百六十二</sup>の<sup>百六十三</sup>前<sup>まへ</sup>

新約全書 使徒行傳第廿二章 自述聖徒三亞西第 八十一



またくせとを

第廿三章 パウロ 議會よめを注うれら候みそつひたるまひと

ひと兄弟をわれ今日よりけるまをまきてのこらと良<sup>まじく</sup>よよ

きて神よつうくたを = 祭司のまをアニアうさうにたえ

るものよ命よそこの口とうたしむ <sup>三</sup> あよおひえパウロ

のれよつひらるにあらくぬもする壁よ神にちんちとうた

んちんちの坐せるに律法よあさうひてそれとさばうんた

めあるにあきてよたぐひ命よそれ候うし <sup>四</sup> かの

たもろよ立るものともつひけるんち神のまの <sup>一</sup> の長

とびくしるや。パウロつひけるん兄弟よわれその祭司のま

さなるとあつごりきあつバ然をツをま <sup>一</sup> かりそんなん

ちの民の有司とそとるなれとも録されたま <sup>六</sup> パウロの

れよのそは半をサドガイの人なるた <sup>六</sup> パリサイのひとある

とありて議會のあつよよばうりつひける <sup>一</sup> ひとと兄弟よ

まねもパリサイの人ま <sup>二</sup> パリサイひとの子あり候 <sup>二</sup> けるまの

よみぐるま <sup>三</sup> 望よよまてそれ <sup>七</sup> 今たよ <sup>七</sup> する <sup>七</sup> パウロの

くつひ <sup>一</sup> う <sup>二</sup> パリサイの人とサドガイのひとのあひ <sup>二</sup> ぎよ <sup>二</sup> 争

論あ <sup>三</sup> きてあ <sup>三</sup> かりたる <sup>三</sup> あ <sup>三</sup> ぼくの人 <sup>三</sup> 々 <sup>三</sup> あ <sup>三</sup> ひ <sup>三</sup> かり <sup>三</sup> たり <sup>三</sup> ハ

そハサドガイひと <sup>二</sup> の復生 <sup>二</sup> ます <sup>二</sup> 天使 <sup>二</sup> お <sup>二</sup> び <sup>二</sup> 靈 <sup>二</sup> と <sup>二</sup> かり <sup>二</sup> とい <sup>二</sup> ひ

パリサイ人 <sup>二</sup> を <sup>二</sup> あ <sup>二</sup> れ <sup>二</sup> を <sup>二</sup> み <sup>二</sup> か <sup>二</sup> あ <sup>二</sup> せ <sup>二</sup> とい <sup>二</sup> く <sup>二</sup> たり <sup>二</sup> 九 <sup>二</sup> 遂 <sup>二</sup> よ <sup>二</sup> あ <sup>二</sup> ぼ <sup>二</sup> 候 <sup>二</sup> 候



るさわぎとちりぬ。パリサイびとの學者たち立ちあがりていひけるは、われらこの人のあしきことばみだりし靈あるひも天使のつれよ。つるまゝあらんまはわれら神は敵は。ゆるぎざるなり。つるまゝ大なるあしきことばみだりしを千夫のりらパウロがわれらよひきさうき人あつておをれ。兵隊は命つれらの中よ。つるまゝせわれらうまひとを陣營よひきつるなり。主その夜パウロのかささるよ。たちりいひたまひくるもパウロよ勇ましくおんぢわれよ。ついでエルサレムよ證せしむる。このあしき口マよもかくあしきく多れをかり。明日よあしきびてユダヤびと黨とむ。

まじもまたちりていひけるは、パウロとあるは、まじ食飲もまじ。おの誓となせるもの。四十人あまりたを。古のれら祭司のまじあしき長老たちのものよ。まじつていひけるは、われらパウロとあるは、まじ食とあしきとたてり。このゆゑよ請なんぢら議會とそまにパウロの事をあはれとせ。つるまゝなして千夫のりらよ告われ。なんぢらよひきさうきつるまゝよ。つれがちうづらざる前よ。われらとちりさんとわれらつてよ。備とあせ。まじあしきにパウロの姉妹の子のくまをせよ。まじ即ちゆきて陣營よ。パウロよつるまじパウロ請てひきさうきん。



の長ひとせよとまねきいひくるはこの少者とせんよんの長  
よつれゆけ。おののめよつとまねきことおきなり夫こ  
こよおいと百夫のうらつれとせんよんの長よつれゆきとい  
ひけるハ囚者パウロわれとまねきておの少者かんちよい  
ふふきあとあねがわれとなんちよつれゆらんおらとねが  
ふり九千夫のうらつれその手とひきひそりなるところよお  
まねきておひらるもなんぢわれよつげんとほるあつハ何  
ぢや子のれいひらるハエダヤ人パウロのこらとまねくハ  
一考察さるをさしえなんぢよまひ明日のれと議會よつ  
れらとさんぶらとと約せよ三されとなんぢのれいハこらよ

あつがよなうれ。おのそのうち四十人あまりのものパウロ  
とこらとまねきハくさるまこのまどと共よちうひて埋伏  
今まよよそのそあくをなしてなんぢのゆきとまねき三  
せんよんの長わらまものよなんぢわれよおの事とつげ  
と人よかるとあつれとひふふくめてあつとさらしめ三ま  
た百夫のうらつれをせめて兵卒二百人騎兵七十人  
手とまねきもの二百人とそあく今夜たひ九時よカイザリヤハ  
ゆけ言うら畜とそあくてパウロとのらしめあつとまねき  
て方伯ペリクスのもとよおらるる一とひま三ま左のふと  
き書とつきとくつり三云クラウテラルシマス最たつとまき方伯

新約全書 一 使徒行傳 第廿三章 百六十五



ヘリクスのやほきをこふ。モよの人エダヤびくよらたれま  
さよあらさねんとせーとわれそのロマ人あるとき。一よ  
よと兵隊とひきおゆきとわれとたけけ。元のれうが訟る也  
志気あらんとおもひあまをその議會よつれらざり。元  
のれがうつうられし。たのれらの律法の論よよれら  
のみよでその死よあるとも。あつまうつあづまきゆを  
みぶるなり。元あつるよエダヤ人あれば害せんとならざる。  
そのことわれよあるとれ。一よよとたごらあれとなんちの  
もとにおくれま。このれ訟る。一ものどもよ命よその  
訟るところ。ばなんちよつげあんとん。元あつよあつて兵

卒ハ命よあつて。ついでハロロとたらさ。夜のうらよアニアパトルス  
よのれを。元あつるひ騎兵をしてハウロとよ。よゆの。一ゆを  
の餘のりのて陣營よら。ゆれを。元騎兵をカイサリヤよのれを  
書をつのよ。一わ。一パウロとよ。ばま。よた。一む。元方伯ぬ  
み。ばよみ。ををて。うれよ。その國とよ。ひキリキヤのもの。か  
る。とありて。元つひける。を。なんち。ばうら。た。あ。もの。ば。あ。  
よ。來らん。とき。われ。なんち。よ。き。く。を。一。遂。よ。う。の。と。あ。れ。と  
ヘロデの公解よあつて。ま。あ。ら。し。め。た。を。

第二十章

五日。ば。あ。その。の。祭司の。と。ア。ナ。ニ。ア。を。長老。だ。ち。あ。  
よ。び。ひ。の。の。辯士。テ。ル。トル。ス。と。あ。ら。し。め。に。く。を。あ。つ。て。パ。ウ。ロ。と。方。伯。



にうらたふニパウロよびつごされーとまテハトルスうく  
への端をひらきてつひけらハ三もつとも尊ペリクスよわれ  
らあんなよよをて大平をえ且この國をあんなの先見よよ  
をて良よあうたまりうれを時よあこつひ地よあこつひて  
感謝せざるな一四今われあつてあんなとあまこつひて  
とせ一請をうとあひてわがまこ一のあこつひてきた  
ま一五そハわれうまの人をみるよ疫病のあこつひ。天下の  
ユダヤびととみごせをあらうれをナザレ宗のよこつひて  
六まの聖殿をけつさんとせりわれらこねとこつひて  
律法よあこつひてとあまをみるさんとあま一よ七千夫の

うらたふニパウロよびつごされーとまテハトルスうく  
への端をひらきてつひけらハ三もつとも尊ペリクスよわれ  
らあんなよよをて大平をえ且この國をあんなの先見よよ  
をて良よあうたまりうれを時よあこつひ地よあこつひて  
感謝せざるな一四今われあつてあんなとあまこつひて  
とせ一請をうとあひてわがまこ一のあこつひてきた  
ま一五そハわれうまの人をみるよ疫病のあこつひ。天下の  
ユダヤびととみごせをあらうれをナザレ宗のよこつひて  
六まの聖殿をけつさんとせりわれらこねとこつひて  
律法よあこつひてとあまをみるさんとあま一よ七千夫の



そひぞかきまへて會堂ありしに城下よりひらぐ坂みよ  
せしころ候いまして見ざる處一且うれしく今われをうら  
たふるところのこころの憑據候たゞこれとてうらまざるま  
とありてト されどこれら候事とわんぢはあらずさん。そ  
れわをもつれらる異端とてある道はまじくはまが列祖  
に神よつづくまじく律法と預言者のふみよあるされ  
こころ候信ししうら義者もたゞ一のうらざるも死しをのみよみ  
うららんとまじく神よよりてわんぢのぞめをまゐらちうれ  
らる望とてあらとありあらず一まじくはまよるをまじく常とみ  
つづくまじく神よもつて人よもつて良心の責あらん

こころ候はくもむるなりまされ數年とるなり一のち施濟をわ  
らたみよあまじく獻祭とせんがうらよか候たり人わんぢ  
まじくはまよるをまじくアジヤよりまじく  
一ユダヤびとらの聖殿よおいてわんぢとあらむることと  
せむ乱れともあらずとみよ一まじくはまよるをまじく  
ららうれしくわんぢのまじくはまよるをまじく一あまじくはま  
たわの議會はまじくはまよるをまじくはまよるを死するものは  
よみかくまのこころはまじくはまよるをまじくはまよるを  
くもむるの一言のほろよこの人々も一まじくはまよるを  
見たりまじく一三まじくはまよるをまじくはまよるを  
ペリウス詳細にその道とあり

新約全書 使徒行傳 第廿一章 廿二節



くれむうねるをまゝあつんとしてひひたるハ千夫のう  
らルシアスのくらんとそのよきわらはしくあんなぢうのこ  
うをあらあんと三 百夫のうらよ命しをパウロをまのう  
めうらあを寛容よしてその友のうれを供給こくあると  
禁せざうしむ 三日のぬちペリクスその妻エダヤ人なる  
テルシラとともいきりパウロをゆしてそのキリストを信  
る道をつともをまき 五 パウロ公義と樽節とまらんとは  
る審判とをらんぜーうをペリクスあられてこくけうのあ  
んぢまはうとあをそのうれ便時とえをまらんとぢをめま  
ん 二 六 ペリクスパウロよき金とえんあをそのうらあ  
あ

あはくうと名と召てともにかこわす 三 二 年とあての  
ちポルキス ペストスとつうものペリクスの職よりあうら  
ペリクス悦とユダヤびうとらんとあいてパウロと獄よ  
はあぎあひ

第五章

はくペストスも任國よりうりて三日のぬちカイサリヤ  
よきエルサレムよの屋あう 三 三 時よさふ一の長ぢらとユダヤ  
のあひぢらたるものちパウロをかあ訴うらあを途  
よをまうらうらんとあひうれよ勸を恩とわきうら  
賜てパウロとエルサレムよめ一たまをらんまを請 四 ペストスあ  
へてうらあをパウロをまのうられてカイサリヤよあうられも

新約全書 使徒行傳 第二十五章 全七



と云うは彼處よあもむくべし五のゆゑになんぢらの  
うち權威あるものどもわれにせよにせよわれにせよ  
証言せよとあるはパウロとピテラスとにパウロのまゝに  
日あかりとまゝにカイザリヤの座に明日の座に  
まゝに命よとパウロとピテラスとにパウロのまゝに  
とエルサレムよりユダヤ人らわれとなちて  
證據とたるはあはれなる重罪とせらるる  
パウロのまゝにユダヤ  
人のおまへにおいひ聖殿まゝカイザリヤの座に犯せらるる  
パウロとピテラスとユダヤ人らわれとなちてパウロと

と云うてのひけるんぢエルサレムよのあり彼處よあ  
いあつたにつき審判をわがまゝにユダヤ人のまゝに  
や否やパウロのまゝにユダヤ人のまゝに  
このまゝに審判をわがまゝに當然なり。われなん  
ぢのまゝに知るまゝにユダヤ人のまゝに不義とせらるる  
と云うて不義はあつて死よあつて罪はあつて  
まゝに死よあつて罪はあつて我ら  
たつてそのまゝに審判をわがまゝに  
てわれらのまゝに交付するものありわれらカイザリヤに上告  
せんまゝにパウロとピテラスとに議事官とあひまをせよとせよ







訊をうけんとして護れんことをめしよより我れん  
トてこれをカイザルよおたるまをせしめしよせおけし三アグリッ  
ペストスよいひけるもわれもまその人よまその人よまその  
ぢむなり。うきいひけるハ明日なんぢおれよ聽せしよ  
よおしとある日アグリッパとブルニがほいよ威儀をそめし  
まかりて千夫の長ぢおしび邑のためときひらぐとこも  
ハ公堂よりぬパウロをペストスの命よしりてひきつりし  
る言ペストスいひらるハアグリッパ王おしびまをわきうとこ  
もにある人かよなんぢこの人よみるまをいしよダヤの  
おほくのくハエルサレムよおしりても亦まのこらりよおいて

もうれよついでわれようのこらりわれハこのおち生るまも  
のよありばとよびさけげまされどわきをれを查看てそ  
のまぬぐきこをせざりしををれを照りれまづうマウグスト  
ハ上告せんともまよよりわれこをかくらんこを定た  
ましよまきこれよついでわが主上よまらまきまき實情をえん  
ゆゑよまれまをまて奏まきまきこをえんがこめな  
んぢらの前ま殊更よアグリッパ王あんぢのまよひきりし  
せまそめしりうをかくるよその罪案をこまそんま  
ハ理ようかまばとおめくハなり

第九十六章

アグリッパパウロよいひけるもあんぢがみぐるのた



めよのいぢもあつとゆるしたるものよおいてパウロ手とのく  
られうがうらたく成ふせうんとしていひたまはニアグリッパ  
王よわがユダヤ人よろうらくらきしよき今日あんぢ  
のまへうとまてぐりいひしこととてうらぐゆるよわれ  
と幸なるものときニ殊よさふいあるをあんぢユダヤび  
との風氣とわれらが論じるところの端をこらぐくあつた  
あふこころなりこのゆゑよねのまへハ耐心てまねよきした  
まへ四それより始よりエルサレムありてわが民のなるよを  
我幼穉ときよりいづよ世とまてせうとユダヤ人ハみま志  
るなるべし五一證とあつんとせむうれハ素よりわが

さきよわれらの教のうちうてあつとも厳とらるよえうら  
ひするパリサイ人なるよと成あつち六今まれたちてまね  
らの列祖よ神のやくそく一たまひ一その望よつきそくは  
かきありてこのほごみハまあちわれらの十二の支派  
のよらもひるもひてきう神よつかけて得んとほるものあ  
るアグリッパ王よまの望のうらまわむユダヤ人よろうく  
つられしハ神まてよ死しそのまよみかくせたりとい  
ふともなんぢうなんぞ信ドかかるとほるや九我もまへ  
まよるをナガレの耶穌の名よさかちらんかかめおほくのこ  
張なりいよとちちとまづうらあひエルサレムよてこのあ



とてたゞせり即ちさのの長たちより權威をうけてあるの  
聖徒をひらきよのれまののありさうとときんそ  
れをよとて諸會堂よりて志をて罰をひてお  
れと褻瀆といふめ。うつ狂るあををうていへたれよ  
つて外國の邑よまをせめあふべし。このとき祭司のとき  
だちより權威と命令をうけてダマスコへゆきよ王よそ  
の道よひらのあらわれ天よりひくをある我見たを日よ  
うまかやまて我おびにゆけるものとめふまて  
らせきわれくみる地よたふる。そのときへブルのさるをよ  
てサウロサウロなんぞわれをせむるやなんぢやげある鞭

とけるらとかくとわれよりくさる聲とわれきんをよ  
れつひける主よなんぢはわれをやうれとくけること  
れをなんぢがせむるところの耶穌なり。なんぢ起てたて  
よ。そのなんぢよありまをハなんぢとたてて役者としま  
たなんぢがまをよ見とていへ。なんぢよありまをせ  
めさんそのあやの證人とあさんかてあふ。われなんぢ  
よまよりてあのみあひいさうとんの手よをまをくあ  
今なんぢとわれよつとをいへ。われの目とひくき暗  
ををられて光よつきサタンの權ををられて神よ歸せぬ  
まをわれをてつとを信むるにまををほみのゆると







信むれば あり 三モ アグリッパ王よ ちよげんと やのふみを 信  
むるに われ あんぢのしん びを する 三 アグリッパパウロよ い  
ひけるを かんぢされを 勸て たやまを キリステアンと あん  
と 三九 パウロのひけるを 容易くも せよ たやまのうらぶら  
も せよ われん たち 爾の みかろは 今 暗われまきくと  
ころの どのの 昏あは なるめ あくして わが おもきものとな  
らん ちよげ 神よ ねがふあり 三 かくかろを ちよげまき王と  
方伯あし びブルニケ まことと 坐せし びらぐ たちを ありぞ  
き 三 相うらべて いひたる まの 入も 死ぶき ちよげと 縲縛よ  
かふる ちよげまき ちよげなる あり 三 アグリッパ ペストスよ ちよげの

いひひたる まの 入も 三 カイザルよ 上告せんといを ざり  
なる ちよげまき ちよげなる ちよげなる ちよげなる

第廿七章

ちよげなる パウロあし び 他 の めい ちよげらと アウグスト隊の  
ひやまんの 長ある エウリアスと ちよげなる ちよげなる ちよげなる  
ニ ちよげなる ちよげなる アジアに ちよげなる ちよげなる  
アドラミテオムの 舟よの ちよげなる 出マケドニヤの テサロニケびと  
アリストタルコ ちよげなる ちよげなる ありき 三 次日 シドニよ ちよげなる  
エウリアス ちよげなる ちよげなる パウロ ちよげなる 待遇 ちよげなる 朋友の ちよげなる ちよげなる  
ちよげなる ちよげなる ちよげなる ちよげなる ちよげなる ちよげなる ちよげなる ちよげなる



このより舟出せし風のさうよよよきてクプロの風下  
のうたは五キリキヤとバムリアの海をさきてルキヤ  
のムラとくく湊よいしれまおのころよ百夫の  
らイタリヤハわらるアレキサンデリアのふねよあひて  
をさよのせり七多日のおびふねのゆくこと遅や  
やよよクニドスよむくるところよいし風順あ  
よよよよよよサルモネをさきクレテのかぎしものころを  
しそ漸よよその岸よそひラサイアの邑よちのき美湊と  
なるるころよいしれま九時をふくことまよひし  
断食の期もまぎぬれを舟路のおやみまよをパウロい

ふりてツひけるをひくよよれおよよまのふあぢハ  
損害おわゆるなだよ積荷と舟のみならずはわらるのい  
のちよよあよまん上あつれども百夫のころハパウロ  
りよころよりも船長と舟主のころを信トり且  
おのみあとい冬張まよは使よろほこのゆあよ  
ピニクスよいしりかころよめあたまのあや。ピニクスを  
このころをいせんところめたるものあや。ピニクスを  
クレテのまのころ西南のかぜよよまの風とそま  
よよひてふくころあや。十三よ南風まづつよあまけ  
まづろくまざりまよころとおひ錨とあげクレテ



よそらてちりしそーに 古ほぶふくニロクルドととまふ  
狂風あまよりおちりきつて 舟をぬきさへひらきつたれ  
敵こゝ紙えびまわすその風よまうせそ かつひはクラウダ  
といく小島のうづもものかゝるをせめきやうやくよ  
て小舟をさむ 既よひきあげのちうねる備おけるも  
のをめて大舟の胴をまぼりうら洲よのりうんまをとお  
それ帆をちりしてながれり 風をげきうりてつぎ  
のひ水夫らつみにまあげまら 第三日よいつりてふわれ  
ら手づつら舟具とあげまら 平のうて多日のおひで日も星  
もみえたりそまききつせぬまぬふまぬつひよ

まきくまらぶき望たえそそり 二人々々ひとく食せばパウロ  
うれしのなつにたちそひひけるハ人々よあんぢうま  
わがひきめをまきクレテよりちあるこゝをせばそあ  
の損害とらげばあるぶきまどなり 今されあんぢうに  
まむむ勇なんぢうのうちひよりだよ生命とらあふもの  
か。た。舟とらあふことあらんのも こそわが屬まる  
とてわがわがはくあるところの神のつひこの夜まがかく  
まらまたちて パウロよおそそまなりれあんぢうあは  
カイザルのまらまたらなうら神ハなんぢととまよあね  
よあるものをまらぶくなんぢよ賜とつくま かのゆあよ



諸人いんごのいさめやうくまれようくりたまくるあまきこのあはに  
ならんとわき神かみを信じまがなをいわねくこのあはに一島あつしま  
おーあげられんモうきて第十四日じゅうしよにちの夜よよりさそわき  
アテリアのうみやたよふ。夜半よなかおろ水夫みづこらきよちつづけ  
つとあひひて元水もとみづをほつとよ二十尋にじふいぢをえたりまきし  
まみてまよしをりよ十五尋じふごいぢをえたり元石もといしよのまうけん  
あまをおそれ艦かんより四よのいかまをおろして夜あけをまぢ  
わびぬ水水夫みづこらあねりののがまんとしを舳しほよりつひを  
おろし状まは状まはあー小艇こていをうみやまぎげたれバ三パウロ百夫ひやくふのこ  
ーらと兵卒へいそよつひくまのひとくも舟ふねよとまうは

をなんぢくまくたまを得えト三らよおのり兵卒へいそら  
小ぬねの索くわをたぢまきそのたつらよまうせり三夜の  
あかんとゆるときパウロまづてのひらぐよ食せん三は  
まゝめでつひくるへなんぢくまぢわびて食せり三あ  
今日けふいままよ十四日じゅうしよにちめな三故ゆゑよまねなんぢらよま  
せん三うはまはむは救まとうなまたはけとなまぐはれを  
なり。なんぢらの頭髮かみひくまぢよなんぢらのうづべより  
あぢさる三如ごと此ごとうにパンをとらまはるの人のま  
し三神を謝すしまあままま食をければ三わらも  
ままいいさんで食せり三ぬぬののれるとらのまねらあま



せて二百七十六人なりき。三、まてよまてくしてあきくれば  
 穀物とらみよまてくぬねをかろくせり。元、夜あけてその地  
 ハーらざれどひとりの海灣をみたり。こゝは洲とまあり。或  
 ハーらまてくえバ、うしこふぬとまてりんと謀つあを  
 たちを錨とらみよまてく航纜とゆめりあまの帆をあげ風  
 はまてくひまてくまてくこゝをまてくはのなづれ  
 あまてくはよりつりてぬねと洲とのりあがくまてく居つ  
 きてうまてく艦ハナハのはがしきつたれよあぶられり  
 三、あまよおりて兵卒あめりとのあまてくまてくせん  
 おそれあまてく殺さんとまてくむ。三、うれとも百夫のうしこ

ハウロとまてくまんとおぬひそのまてくめとまてり且およま  
 るるものらまてく水よまてくつりてそのほろふあまてく板あ  
 るひをぬねのくまてくけよのまてく岸よくまてく人こゝに命た  
 まてくのまてくまてくまてくまてく得てまてくまてくのほれ  
 三

第八章

三、まてくまてくまてくまてくまてくまてくまてくまてくまてく  
 とまてくまてくまてくまてくまてくまてくまてくまてくまてく  
 のまてく雨ふりと寒まてくまてくまてく火とたまてくまてく衆人  
 とまてくまてく三、ハウロおぬくの柴とあまてく火よまてくまてく  
 まてくまてくより蝮つをまてくつりてその手よつけまてく夷人らまてく



のその手はかくをたるとしてたづひよりひたすんこの人  
ハキムシヒとをあらせしものなるん。うれ海よりのがれ  
たるとつゝも天理そのいさあことゆるさるなり  
パウロまむと火のなりによりおきて害とうらるなり  
なう六うれはパウロはうのひてその腫る。あらひいた  
ちまも付てぬることあらんとおむしよひしうら  
ぐくもうれは害のおよむるをそそのおむしと轉  
る神なりとつくも七まの長とプブリヲと名つくまのほ  
うまよかのうらるる田地あり。うれはうらるとむる海をねん  
あろよ三日やぶらせしむ。まはまはプブリヲの父ねらと痢

病はうづひてぬとまうパウロそのまよひしをいは  
して手はそのうらよ按これをいやせり九このことわ  
うバ島はあるところの他のやめるものまはまのうら  
まはまのうらと得たり十うれは禮をあらくまてわれとうやま  
ひまは舟出のとまらよのぞみせわれとうなきてうおたぬも  
のぞおくまり十一うらるる三ヶ月をる後あのうらよて冬を  
まごせーテラスクリの號あるアレキサンテリアのぬねよのうら  
で十三スラクサよつき三日とまねる十三かことよりまらる  
てレギヲよしとま一日をる南風おあうたねバ次日プテラリ  
よし十四兄弟たちよあひうれと請よまうせと七日と



とまらぬ。さうして羅馬よゆ<sup>十五</sup>羅馬の兄弟<sup>十六</sup>たちわれらのこ  
とをきく。アビーポロムあよび<sup>十七</sup>三館<sup>十八</sup>といくるところよきなり  
てわれらとむくバウロあれをて神は謝<sup>十九</sup>—そのあつりよ  
ちううとえさう<sup>二十</sup>まきよわれら羅馬よいしを—よ百夫<sup>二十一</sup>の  
うらめしうとと王<sup>二十二</sup>とまめる兵隊<sup>二十三</sup>のうらよわしを  
さねどパウロをひくその守兵<sup>二十四</sup>ととに別<sup>二十五</sup>よみづううと  
ううとゆるされなり<sup>二十六</sup>三日<sup>二十七</sup>とゆるのちパウロエダヤ人<sup>二十八</sup>の  
おもたてるものともとよびあつむうれらのあつまれると  
きられよいひなるいひら<sup>二十九</sup>兄弟<sup>三十</sup>よわれいまごうが民<sup>三十一</sup>ま  
列祖<sup>三十二</sup>の例<sup>三十三</sup>よもてかまごうとまなせ—とたり。あつる

よエルサレムより囚人<sup>一</sup>となりて羅馬びとの手よとさうれた  
よ<sup>二</sup>羅馬人<sup>三</sup>まきよそれとあつたねど死<sup>四</sup>べきつみあき  
ゆゑよそれとゆるさんとおく<sup>五</sup>エダヤ人<sup>六</sup>あれはまを  
みよよより我<sup>七</sup>やむうととえび—カイザル<sup>八</sup>よ上告<sup>九</sup>ま。あつ  
れもまごう國<sup>十</sup>のたみとうらさんためよいあつた<sup>十一</sup>これ  
ようまをそれなんぢうよ會<sup>十二</sup>とたにかうんこくとこくる  
なりそのそれイスラエル<sup>十三</sup>のそみのうめよこの鍵<sup>十四</sup>よつるが  
るまをたかり<sup>十五</sup>三<sup>十六</sup>うれらつひらるいそれらエダヤよりなんぢ  
よつて書<sup>十七</sup>信<sup>十八</sup>をうけびまご兄弟<sup>十九</sup>たちのきり—ものもあ  
んぢよつて何<sup>二十</sup>のあしきおとあつたそれらよ報<sup>二十一</sup>まこつ



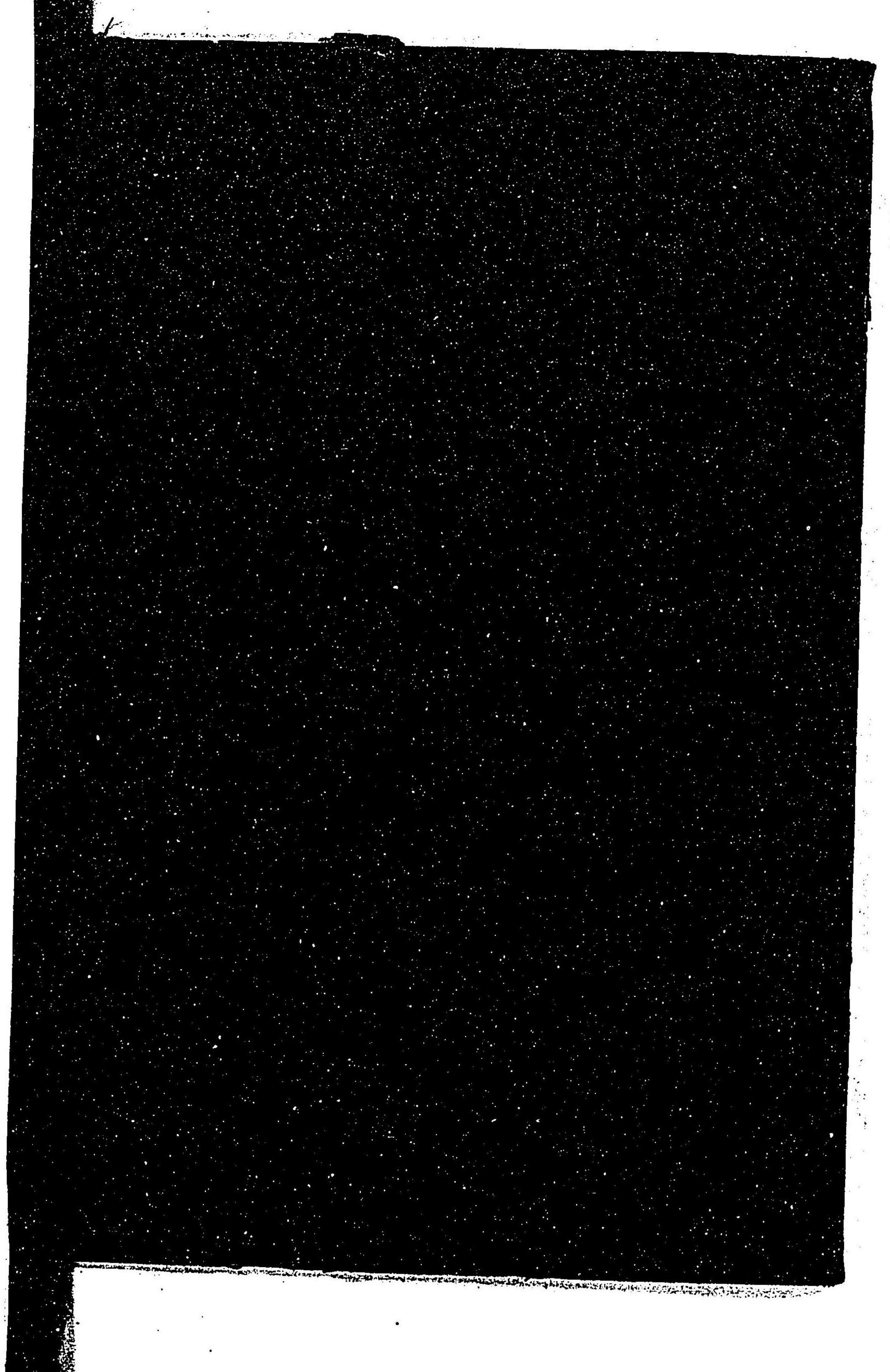
そのものなり 三 されしむるぢのあふところを聞  
んとす。そのいわれしつゝもあめおの宗旨のそらさる  
あればなり 三 既よさるめたる日よあひびておほくの人  
パウロのやうにきこれしパウロ朝やより暮しのま  
でモーセの律法とよげんトやの書といき神國のまこと  
まうられしとあり。若耶穌のまことうりてうれしは  
まぬたり 三 そのまことばは感トてあれと然とさるものあり  
まこと信ぜざるものもありて 五 たがひは相あもさるによ  
つひよあをそけそ。其まことうんとせしきパウロ一言をか  
たをらるハ誠あるうふ 聖靈よげんあやイザヤよとらるわ

れらの列祖よかき言。そのまことばよ云ぢの民よ  
ゆきそつげよ。あんどけしきけともさるらばまこともみ  
ニ 三 そのこのたみ目よて見みよて聽あふよとさるらる  
悔改てされよいやされんこととおそれその心とほあ  
耳とおひ目ととらさると云のあふよあんどけさるら  
神のまことばの異邦人よおくられうれしはこれとまこと  
元 三 ハウロがまの言はつひまことばユダヤ人ありま  
てたがひよあふある 爭論とあせり 三 のてパウロその  
うらうけ一家よとらるら 全二三年まきてまことありあ  
とまらぬとむりてまことうら神國のまこと主い











29  
111  
M

021634-001-8

29-111

新約全書

和1冊

〔出版事項不明〕

ABI-1542

